

【図2】

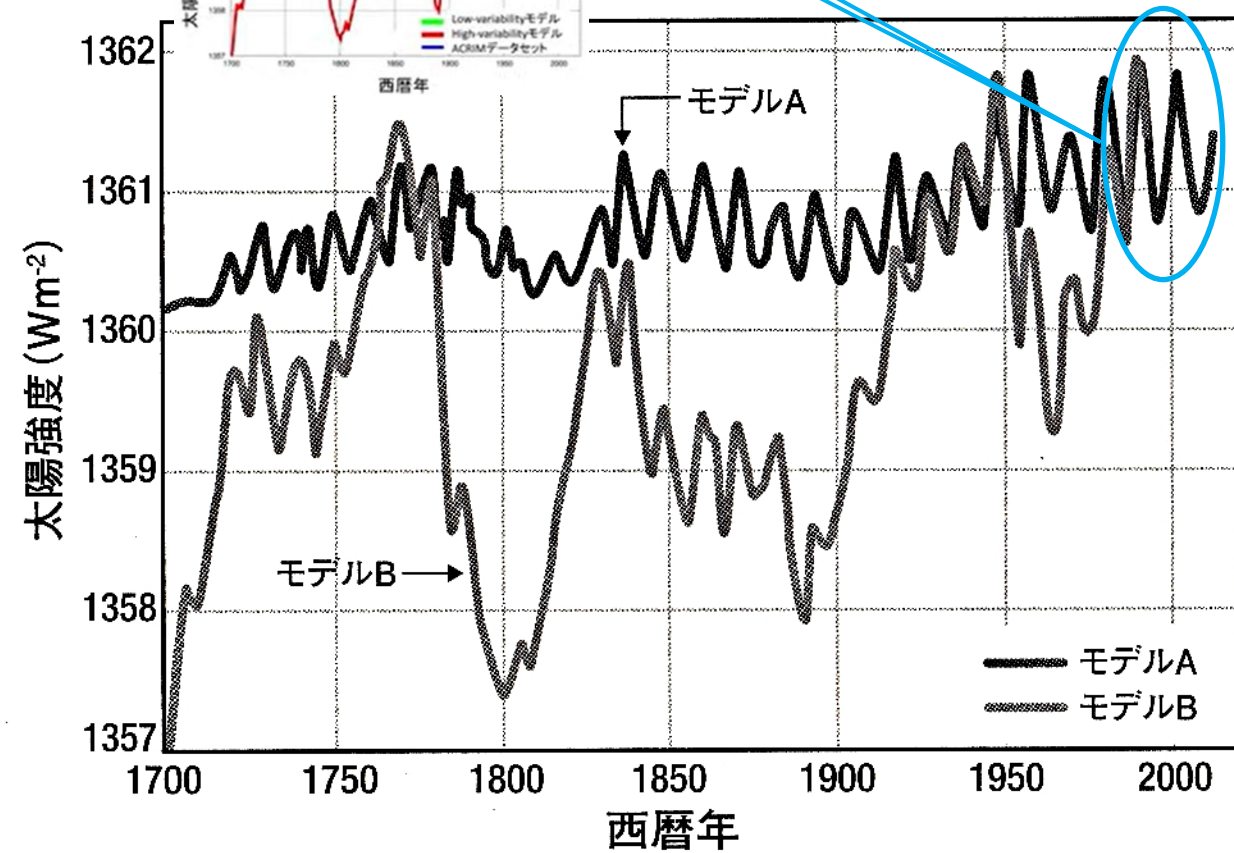
近年の温暖化は、

太陽放射強度（地球の気候変化に影響を及ぼす太陽活動変化）によるのか？

CO₂の排出増によるのか？

- IPCC説は、モデルAの、太陽活動変化は太陽の黒点数の11年周期のみの太陽定数（長期的には殆ど横ばい）とし、温暖化の要因を、CO₂排出にチューニングしています。
- 田中説は、モデルBの、太陽放射強度は長期的に大きく変動し気温変動の要因であるとしています。田中教授は、モデルBは、ヒートアイランド効果を差し引いた気温変動測定とほぼ一致し、データの的に正しいとします。
- 古生代（両生類、魚類）、中生代（恐竜などの大型爬虫類、鳥類）に続く、新生代（哺乳類、人類）の気候変動に係る研究発表を見てみましょう。〔P2〕参照。
- ✓ 人為起源のCO₂排出がゼロの、4000万年～6600万年前の、時代に、今より8℃～13℃も高い時期が続きました。温暖化の要因が、人為起源のCO₂とする仮説は崩れますね。
 - ・ 古世代、中世代の気候変動〔P4〕も併せて参照。
- コロナ化で経済が停滞し、CO₂排出が▼7%減少しました。でも、気温は変化しませんでした。〔P5〕を参照。
- 近年、嘘をつかず「脱炭素政策は有害かつ非現実的」と主張する科学者が増えています。〔P6〕参照。

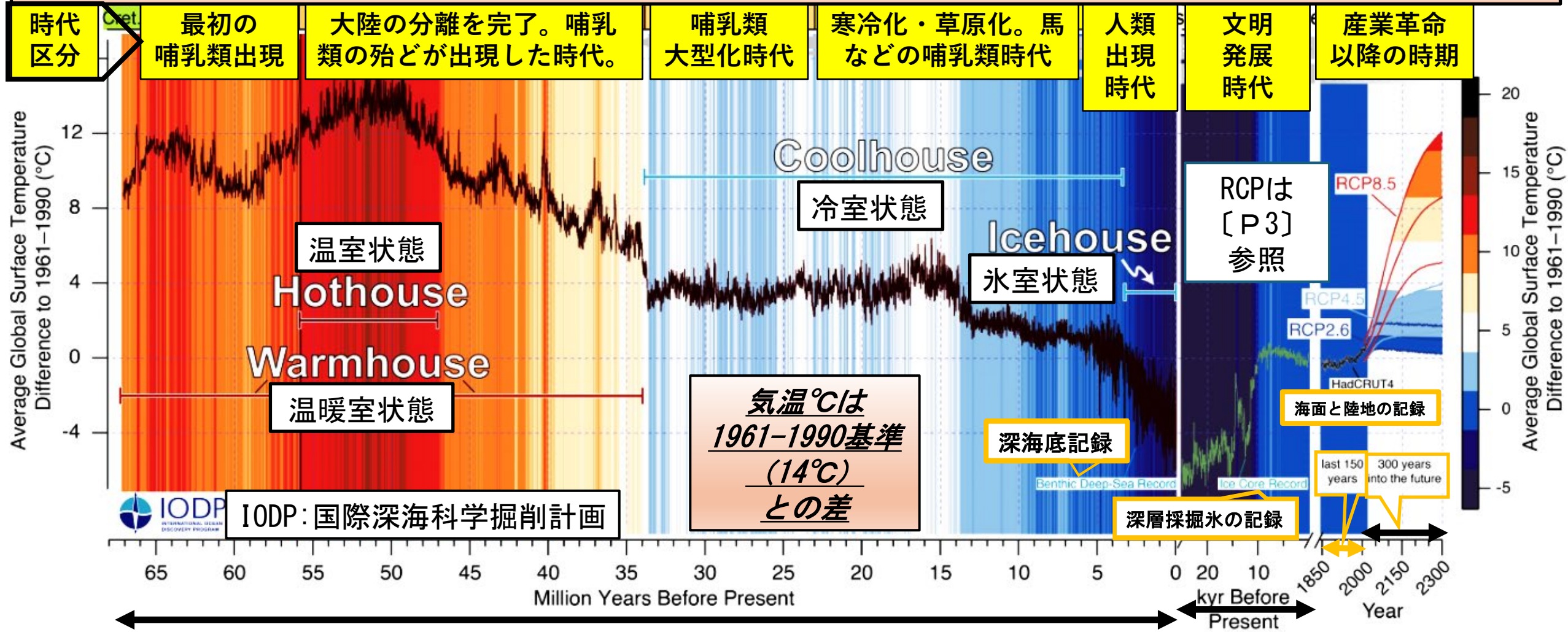
図-3



太陽放射強度(1700～2004)のモデルA(上)とモデルB(下)による推定値。
 (Scafetta and Willson 2014からの引用改変：<https://link.springer.com/article/10.1007/s10509-013-1775-9>)

人類出現から6600万年前の、新生代（哺乳類の時代）以降の気候曲線

米カリフォルニア大学サンタクルーズ校、独ブレーメン大学海洋環境科学センターらの国際研究チームは、6600万年前の地球の気候変動の記録を、科学掘削船による海底の調査を通じて、50年以上に亘って世界中でサンプル採取をしました。サンプル材料を回収・分析し、統合曲線に纏め、新生代以降の地球の気候を再構築したのです。



2020年9月11日、学術雑誌「サイエンス」における研究発表「新しい新生代気候曲線 (CENOGRID)」より引用 CENOGRID (CENOzoic Global Reference benthic foraminifer carbon and oxygen Isotope Dataset) [2]

IPCC Prediction (将来予測) の内訳としてのRCPシナリオ (Representative Concentration Pathways : CO₂などの濃度経路シナリオ)

〔P 2〕のRCP2.6～RCP8.5の説明

IPCCの温暖化モデルは、4つのRCPシナリオで構成されています。シナリオ名の2.6～8.5は、各シナリオの温暖化対策の結果による、CO₂の2100年における排出量の数量（RCP8.5では8.5W/m²）を名前に付しています。また、各シナリオの対策に応じた、気温の上昇予測を1986～2005年の基準値比の差で予測しています（表）。

RCPシナリオ図（℃、年）

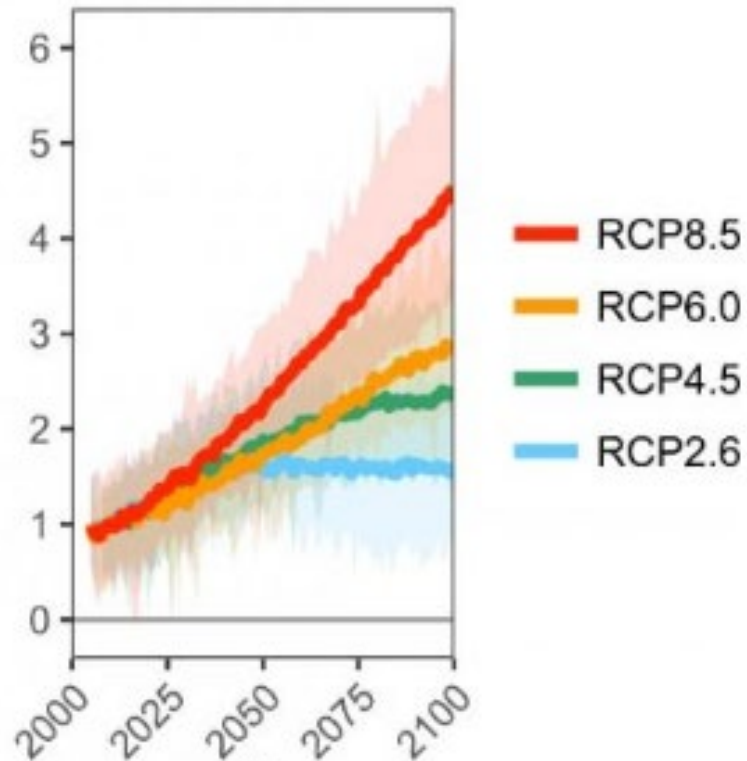


表. 1986～2005年を基準とした21世紀末の世界平均地上気温の予測

シナリオ名称	温暖化対策	平均(℃)	「可能性が高い」予測幅 (℃)
RCP8.5	対策なし	+3.7	+2.6～+4.8
RCP6.0	少	+2.2	+1.4～+3.1
RCP4.5	中	+1.8	+1.1～+2.6
RCP2.6	最大	+1.0	+0.3～+1.7

略称	シナリオのタイプ	2100年 放射強制力
RCP8.5	高位参照シナリオ	8.5 W/m ²
RCP6	高位安定化シナリオ	6.0 W/m ²
RCP4.5	中位安定化シナリオ	4.5 W/m ²
RCP2.6/2.9	低位安定化シナリオ	2.6/2.9 W/m ²

古生代・中生代の気候

今より13°Cも気温が高かったのに、温暖化の暴走など起きなかった。

コルダイテス
葉の長さ1m!
の裸子植物

高さ30mはある巨大シダ植物
封印木 鱗木



気温が1.5°C上昇すると
温暖化が暴走するは脅
しである。
気候危機など存在しな
い。(世界気候宣言)

<http://girlschannel.net/topics/843929/>

新型コロナウイルス感染症の流行による
温室効果ガスや人為起源エアロゾル等の排出量減少が
(CO₂排出量が7%減少)
地球温暖化の進行に与える影響を評価しました。

国際研究チームにより、2020～2021年の2年間のみ温室効果ガスや人為起源エアロゾル等の排出量が減少しても、2020～2024年の地上気温や降水量にはほとんど影響しないことが示されました。

この結果は、コロナ禍による一時的な排出量減少が地球温暖化の進行に与える影響は限定的であることを示しています。

2021年 5月 7日

国立研究開発法人海洋研究開発機構

気象庁気象研究所

「コロナ禍によるCO₂等排出量の減少が地球温暖化に与える影響は限定的」より引用
(「Global News View」記事)

「嘘をつかない科学者」もいます。世界の60以上の国・地域の1900名以上。

「河合塾 大阪 講演会」のチラシより引用

「地球温暖化ってナニ？」と聞かれたら、今どきだれもが「人間が石油や石炭を使って出たCO2（二酸化炭素）などの温室効果ガスが増えて、気温が上がり続けていること」と答えるでしょう。多くの人が信じている、この「人為的CO2温暖化説」の根拠は、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の報告書です。

このIPCCの見解をくつがえす衝撃のニュースが舞い込んできました。なんと、「気候危機は存在しない」、「脱炭素政策は有害かつ非現実的」とする「世界気候宣言」を、世界の科学者が、2019年に発表したのです。今や60以上の国・地域の1900名以上の研究者が署名。ノーベル物理学賞を受賞した米国のジョン・F・クラウザー博士が署名したことでも話題になりました。

この「宣言」に署名した日本の科学者の一人が、大気科学者の田中博筑波大学名誉教授で、「自然変動が大きい温暖化のほぼ全てを人的変動としてきたのは大きな過ちだ」と述べておられます。

今回の講演では、データを使いながらビジュアルに「地球温暖化」の“虚と実”を読み解いていただきます。

河合塾生はもちろん、広く中高生・高卒生、保護者の方々などの参加をお待ちしています。（講演は2024年6月30日に開催されました。）

2024河合塾文化講演会シリーズ

「温暖化」の虚と実

大気科学者 田中博 名誉教授が語る

「気候危機は存在しない」宣言の衝撃!

講演者 田中博 筑波大学名誉教授

講演会日時・会場
6月30日(日)
14:00~16:00 河合塾 大阪校
開演は13:30

■田中博 名誉教授 プロフィール■
1957年生まれ、米国でPh.D.を取得し、ミズーリ大学やアラバマ大学での研究生活を経て、筑波大学計算科学センター教授、同年、定年退職し、筑波大学名誉教授に。専門は大気科学、日本気象学会元正会員。著書に「温暖化の虚と実」、「地球大気の科学」、(自注)「地球温暖化」など、NHK高校講座「地球」を10年担当、筑波大学(自注)の気象学を担当中。

■この宣言に署名した日本の科学者の一人が、大気科学者の田中博 筑波大学名誉教授で、「自然変動が大きい温暖化のほぼ全てを人的変動としてきたのは大きな過ちだ」と述べておられます。今回の講演では、データを使いながらビジュアルに「地球温暖化」の“虚と実”を読み解いていただきます。

河合塾生はもちろん、広く中高生・高卒生、保護者の方々などの参加をお待ちしています。 (小嶋文朗 著、神坂 直樹)

入場無料・申込制

河合塾 大阪校
06-6375-8581
〒531-0072
大阪府大阪市北区豊崎3-13-1

【アクセス】
●地下鉄御堂筋線の御堂筋駅(出口)から徒歩2分
●阪大入新橋駅(阪大前)から徒歩5分
●JR大塚から徒歩1分

河合塾